HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自然写真および自然番組を通した自然の理解 : 自然写真家や自然番組制作者の意図 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	大原, 尚之
Citation	北海道大学. 博士(環境科学) 甲第13889号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78564
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Naoyuki_OHARA_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

博士（環境科学）　　氏 名 大 原 尚 之

審査委員　主査　教 授　山 中 康 裕
副査　教 授　渡 邊 悌 二
副査　准教授　白 岩 孝 行
副査　教 授　宮 内 泰 介（大学院文学研究院）

学 位 論 文 題 名

自然写真および自然番組を通した自然の理解 － 自然写真家や自然番組制作者の意図－
(Understanding nature through photography and television programs:
The will of nature photographers and producers)

現在、私たちは、自然を題材にした自然写真や自然番組などのメディアを通して、自然について理解している。先行研究では、写真や映像の作品の分析から、それらが環境政策に影響していたことや、写真家や映像制作者たちの意図について遡及的かつ間接的に推測されている(e.g. Dunaway 2006, Deluca and Demo 2000, Nobuoka 2009)。本研究では、彼らの意図や制作過程を明らかにするため、第2章では道内で活躍する自然写真家を、第3章ではNHKの自然番組スタッフを対象に、フィールド調査や半構造化インタビュー、文献調査をメインとした質的調査を行った。また、これまで彼らの持つ社会的役割やネットメディアの影響も示した。

第2章では、北海道内で活躍するベテラン・新進の自然写真家18人へのインタビューやフィールド調査、そして過去の自然写真家に関する文献調査を行った。多くの自然写真家は自然科学的な知見を把握してから自然写真を撮っている。被写体について理解するため、自然写真家は事前に論文を読んだり、図鑑を見たり、自然科学の研究者らと積極的に関わったりすることで、被写体にまつわる自然科学的な知見をより多く得ようとしている。自然写真家にとって、自然写真は野外観察をとおしてできた、専門的かつ個人的な経験によって作られたものである。自然写真家の意図とは、被写体について撮影者自身がどのような理解を得ているのかを写真として証明することである。調査では、写真家が持っていた写真の本来の意図が、ストックフォトの使用によって隠れたり消されたりすることがあることも判明した。ストックフォトのシステムを通した写真画像の拡散は、自然写真家が提供してくれる自然科学に関する知識について、読者が得る機会を奪われている可能性がある。この状態が続けば、一般の人々が、自然科学的に質が保証された自然写真を得ることが今後難しくなるだろう。

第3章では、先行研究で指摘されてきた、自然番組の特徴「自然番組には自然科学的な科学知見は描かれてはいない(Absence of Science, AoS)」に注目した。また、第2章と同様に、自然番組制作者がネットメディアにもつ違和感についても考察する。今回、NHK制作の自

然番組やその制作者を対象に、(1) NHKの自然番組をAoSから見たらどうか、BBCとの共通点・相違点は何か、(2) NetflixやYouTubeなどのネットメディアで発表されている(自然)番組を考慮すると、AoSをどう拡張・修正するか、を考察した。NHKは、「映像詩 里山」のように、AoSと見なされる科学情報がほとんど可視化されていない自然番組を制作している一方、「ダーウィンが来た！」のように、自然科学の情報を主に伝える自然番組も制作している。各番組の意図に基づいて、制作者によって自然科学を可視化するかどうか検討され、AoSらしい番組からAoSでない番組までの違いが生み出されていた。

NHKは、撮影機材としてビデオを古くから用いており、そのことが自然科学を可視化できている自然番組も生み出すことに繋がった。聞き取り結果からは、BBCでは、フィルム撮影およびそれに適したシナリオによって、AoSと見なされた自然番組が生まれているようである。しかし、NHKとBBCともに、自然科学を可視化しているとはいえない番組も含めて、科学的知見を把握することをともに行っている。その意味では、Neglect of Science (NoS)とは言えない。近年では、NetflixやYouTubeなどの、既存のTV番組放送以外の形式で、自然を題材にした番組や映像が制作・公開されるようになった。NHK制作者たちは、こうしたネットメディア発の番組・映像に、自然科学的知見に対する把握が軽視されているのでは(NoSされているのでは)と違和感を抱いている。

以上、本論文は、自然写真や自然番組の制作者に聞き取り調査、関連する文献調査を行い、彼らの制作過程や意図を明らかにした。彼らは自然科学の科学的知見を把握しているが、自然科学の単なる可視化ではないとも意識している。制作者により違いがあるが、自然を伝えるために、長い時間をかけて、自然科学の科学知見を把握し、自然写真や自然番組を作っていることは、一般の人々がそれらを通じて、自然科学を理解していることについて、自然写真や自然番組の制作者が「質の保証」の社会的役割を果たしていることになっている。その一方、制作者は、ネットメディア発の番組や映像に対して、違和感を抱いており、それらには「質の保証」がなされていないものも混じっているため、一般の人々が「見た目」で選択するならば、「質の保証」がされていないもの(NoS)を通じて、自然科学に基づかない理解が拡がる可能性が高くなるだろう。今後、本研究で得られた主張をより確かなものにするためには、研究対象を自然写真から他のジャンルへ、国内から海外(特に現在のBBC)に拡げる。今回は制作者に注目したが、一般の人々の受け止め方にも注目することや、ネットメディアでも「質の保証」に繋がる方策を探ること、などを考察する必要があるだろう。今回扱わなかった、自然写真・自然番組で起きる「やらせ」について、制作者の意図と結びつけて考察する必要もあるだろう。

本論文は、自然を題材にした自然写真や自然番組などの伝統的メディアが縮小しつつあるとともに、ネットメディアが本格化した状況において、これまで学術的に指摘されてきたことをネットメディアを含めた議論に発展させることにより、伝統的メディアの役割についてさらに解明することができると期待される。

審査委員一同は、これらの成果を高く評価し、また研究者として誠実かつ熱心であり、大学院博士課程における研鑽や修得単位などもあわせ、申請者が博士(環境科学)の学位を受 けるのに充分な資格を有するものと判定した。